

## 台湾における芥川龍之介受容の諸相

秋吉, 收  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1785510>

---

出版情報：言語文化論究. 37, pp.79-101, 2016-10-14. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

## 台湾における芥川龍之介受容の諸相

秋 吉 收

### 序

筆者は、以前に拙稿「近代中国における大正文学の受容——『現代日本小説集』及び芥川龍之介を手掛かりとして」<sup>1</sup>において、大陸中国での芥川龍之介受容について考察したことがある。同時代の近代中国において、芥川龍之介は『支那遊記』（1925年、改造社）に対する批判など種々の問題をはらみながらも大いに注目され、其の作品も魯迅を始めとする数多くの文人によって翻訳紹介されていることが確認された。中国の近代文学が創出される課程で、芥川は確実に足跡を留めていたのである。

それでは、同じ中国語圏に位置する台湾ではどうだろうか。実は台湾においても近年、芥川龍之介の翻訳は盛んに行われており、また関連書、研究書も数多く出版され、日本近代文学の経典として、やはり少なからぬ注目を浴びていることが確認される。

だが、芥川と同時代の1920、30年代ではどうだろうか。やはり大陸中国同様、中国語による多くの翻訳や論評が発信されていたのだろうか？ その答えは「No.」である。当時において、芥川翻訳作品集の出版が皆無であるばかりか、台湾で発行された新聞や雑誌の上にも、中国語に翻訳された芥川の作品紹介など、管見の限り一切求めることはできない。そこには無論、1895年から1945年までの50年間にわたって日本の植民地支配を受けたことが大きく影を落としている。

小論は、台湾における芥川受容の諸相について、可能な限り探索・分析することを目的とする。その「受容」状況について、まずは中国語に翻訳されたもの、さらには「台湾人」の手になるものに注目するが、日本植民地という特殊環境の中で、「日本語」「日本人」にも考察を広げる必要があるかもしれない。

---

現在の台湾で、芥川の翻訳・紹介書や研究書が数多く出版されると書いたが、一つ注意したいのは、それはほぼすべてが、日本文学としての芥川の特質や評価を述べたものであり、“台湾”の文脈の下、台湾と関連づけて芥川（文学）を取り上げ、分析したものはほとんど存在しないことである<sup>2</sup>。誤解を恐れずに言うならば、台湾における芥川研究のすべては、日本における芥川の解説を基本的にそのまま襲ったものである。大陸中国では、芥川文学の中国近代文学創出における意義や、彼の言説を複雑な日中関係を照射するものとして如何に捉えるか、自国の文壇に引きつけてあれだけ喧しく論議されていたが、台湾においては、当時においても現代においてもそうした動向は一切求めることができない。

本節ではまず、現代の台湾における芥川文学の受容状況について、国家図書館（台湾）のデータ

ベース等を活用しつつ瞥見しておきたい。国家図書館に所蔵される芥川龍之介の（中国語）翻訳書は、1969年から2015年までの出版で55冊に上る。1987年の戒厳令解除前後以降は、多くの出版社から、毎年まんべんなく出ており活況を呈している。特筆されるのは、同じ作品を複数の訳者が何度も訳し直して出版していることで、人気のほどが窺い知れる。筆者の手許に収集する20冊ほどの版本のうち、戒厳令解除前年の1986年4月初版『羅生門』（14篇収録。水牛図書出版事業有限公司〔台北〕。「哲学叢書22」）は、60年代末もしくは70年代初めの版本から装丁のみをすげ替えた改版もので、訳者の葉笛は、戦後における芥川紹介の先駆者と見なすことができる。彼は「1968年10月於台南海東」と附される「訳者後記」で次のように記している。

我不憚自己的譯筆拙劣把本書交給讀者們，不過是想打開一面窗子，密閉的房裡，沒有陽光、沒有空氣，文學亦復此，我們應該把四面八方的文字之窗打開，讓和煦的陽光進來，讓清新的空氣進來，讓我們的眼界更擴大，臺灣的文字才能更豐盛起來。<sup>3</sup>

（拙訳：自分の翻訳の拙劣なることも顧みず本書を讀者に送り出すが、それはただ窓を一つ開け放ちただけだ。密閉された部屋では、日光も差さず空気も通らないが、文学もこれと同様で、我々は四方八方の文字の窓を開け放ち、暖かな陽光と、新鮮な空気を導き入れる。我々の視野はさらに拡がり、台湾の文学はそこで初めてさらに豊かで盛んになるのだ。）

該書の巻頭には当時の東京大学文学部国文科教授で芥川研究の泰斗吉田精一の序文（1968年6月）も掲げ、吉田から台湾へのエールが送られている。日本文学の代表作家たる芥川を（中国語にて初めて？）台湾で紹介するその自負の念が伝わってくる出版である。台湾版ウイキペディアによれば、訳者の葉笛（1931-2006）、本名葉寄民は台南の人で、台南師範学校（現国立台南大学）卒業、東京大学に留学経験もあり、翻訳のほか詩作、散文、評論の執筆も多く『葉笛全集』全18巻（2007年、国家台湾文学館）があるという。該書には「關於芥川龍之介」の後に「關於葉笛」の文章も収められ、次のように紹介されている。

在本省籍の作家中，葉笛的出現是很早的，而且活動面也非常之廣。（中略）他的主要工作似乎就是翻譯了，其中對於尼采的散文，波特萊爾的散文詩，芥川龍之介的小說的介紹，尤為賣力。「笠」詩刊創刊以後他成為同仁之一，對於批評工作也同時進行。（……）他的日文程度之好，可以與中文相提並論甚而還有超過中文的地方。<sup>4</sup>

（拙訳：本省籍の作家の中でも、葉笛の出現はとても早かったし、活動面も非常に広汎であった。（中略）彼の主要な業績はやはり翻訳にあり、中でもニーチェの散文、ボードレールの散文詩、芥川龍之介の小説の紹介は特にすぐれる。『笠』詩刊が創刊されると彼も同人となり、批評の筆も執っている。（……）彼の日本語の秀逸なること、中国語に全く遜色なく、時に中国語を凌駕するほどだ。）

こうした優秀なる翻訳家の努力の下で、芥川の文学は台湾に受け入れられていった。その後陸続と翻訳が出版されて現在に到る。なお、葉笛の訳は繰り返し出版され、1995年には同じ水牛出版から「哲学叢書23」と「同24」として『河童』（9篇収録）と『地獄変』（7篇収録）が出されており、また2006年には、桂冠図書股份有限公司より、「桂冠世界文学名著143」と銘打ち『羅生門』（水牛出版の前掲書とほぼ同内容）が出ている。現代台湾における芥川受容の活況を具体的に辿るために、以下、訳者の異なるものを並べてみる。

1. 黄恆正訳『羅生門』（「世界文学全集64」、39篇収録）  
1986年3月初版。遠景出版事業公司（台北）  
筆者按：手許の版本は「1994年8月第十版」とあり、好評の様子が窺える。
2. 鍾肇政他4名訳『地獄變』（「新潮文庫27」、17篇収録）  
1997年2月新訳版、2007年8月再版。志文出版社（台北）
3. 鄭秀美・許朝棟・劉華亭訳『羅生門』（「日本経典名著系列40」、9篇収録）  
1998年2月初版、2004年11月第6刷、星光出版社（台北）
4. 劉華亭訳『地獄変』（「日本経典名著系列42」、6篇収録）  
1998年6月初版、2004年11月第3刷
5. 許朝棟訳『河童』（「日本経典名著系列43」、5篇収録）  
1998年7月初版、2004年11月第2刷  
按：以上三冊はセット販売。それぞれに吉田精一「解説」と「芥川年譜」を附す。
6. 李燕芬訳『羅生門』（「世界文集15」、8篇収録）  
2001年3月初版。小知堂文化事業有限公司（台北）
7. 李毓昭訳『羅生門』（「愛蔵本系列：37」、7篇収録）  
2004年9月初版、2007年4月二刷。晨星出版有限公司（台中）
8. 呉樹文訳『蜘蛛絲・舞會・秋——芥川龍之介短篇精選集』（「新潮文庫469」、27篇収録）  
2005年1月初版、2007年8月再版、志文出版社（台北）  
按：「我的散文詩」も収録される。巻末「年譜」附。
9. 紫石作坊訳『羅生門 芥川龍之介短篇傑作選』（5篇収録）  
2005年6月初版。麥田出版（台北。香港、マレーシアにも発行所と記載あり。）  
按：訳者の筆名ともリンクしたような、瀟洒な装丁と編集。日本風景・建築物等の美しい写真を随所に配す。
10. 楊夢周訳『當代名家 芥川語録』（7篇収録）  
2005年5月初版。聯經出版事業股份有限公司（台北）  
按：小説でなく、「侏儒の言葉」や「小説作法十則」「西方の人」など、エッセイ、箴言等を収録。「付録」として、「芥川漢詩鈔」収録。

現代（戦後）の台湾において、芥川の文学が内容的にもある程度広範に、また多くの年代、階層に受け入れられている様子が窺える。芥川が存在は、あたかも現代の日本と同じように自然で（むしろ日本よりも身近に）、台湾社会に溶け込んでいるようだ<sup>5</sup>。競うように多くの訳者がそれぞれの翻訳を世に問うその様子は、あたかも中国・台湾における村上春樹ブームを彷彿させる。上掲書8

番の巻頭「芥川龍之介の文学世界／代譯序」には次のような言葉が見えている。

時代進入公元二〇〇〇年，世界確實熱烈了一番。人們以不同的形式予以慶賀，予以紀念。更因為適逢龍年，華人後裔不乏事先作好計劃，生養龍子龍孫。日本也盛行十二肖屬的習俗，生活中所在多見。說到龍年添子，不禁使人聯想到日本文學上一枝獨秀的才子——芥川龍之介。

（拙訳：時代が西暦2000年に入るや、世界は確かにひとしきり沸き立った。人々はそれぞれのでやり方で慶賀し、記念した。更にはそれがまさに龍年に当たったため、華人の後裔たちはあらかじめきちんと準備して、龍子龍孫を生み育てる計画にも手落ちはなかった。日本でも生年を干支で表す習慣は浸透しており、生活の中でもよく見かける。そして龍年に生まれた子とえば、日本文学史上稀有なる天才——芥川龍之介に思い至らぬ者はいないだろう。）

台湾における芥川の流行は、すでに日本を大きく凌駕していたと言えるかもしれない。

冒頭に述べたように、こうした近年における歓迎状況と裏腹に、戦前、芥川と同時代の台湾において、芥川の名前は寥寥声なきが如く、ほとんど探し当てることができない。以下、その実際状況と背景について考察を進めていくことにする。

## 二

戦前の台湾で「中国語」による芥川の翻訳（書）、研究の類いは、管見の限り一切求めることができなかった。植民地下（1895-1945）の台湾では日本の言語政策により、社会における日本語の比重が年を追うごとに高まり、日本語を通じて学習や創作活動を行う台湾人が急速に増加したことがその背景にある。日本による1937年の大陸侵攻（盧溝橋事件）以降は、公共の出版物での日本語以外の使用が一切禁止されたことで、「中国語（台湾語含む）」での発表は、ほぼその命脈を絶たれることになる。「中国語」による活動は、統治国日本への抵抗を意味すると同時に、「母国」たる中国の新文学運動への支持を表明するものであったが、当時の台湾においてそうした文脈の上に日本の近代文学たる芥川の文学を位置付けることは適当ではなかったかもしれない。さらに言えば、限られた時間と悲惨な経済状況、しかも少数にての活動という条件の中で、彼らの文学活動がそこまでの広がりを持つだけの余裕を有し得なかったことも一つの大きな原因だったのではないか。

ここで視野を拡げ、「日本語」も含めて戦前の「台湾」で紹介された「芥川龍之介」ということでは、まずは『台湾日日新報』に掲載された、1927年の芥川服毒自殺に関する記事が挙げられる。これについては彭春陽による先行研究「芥川龍之介 台湾との接点」（2014年、宮坂覚編『芥川龍之介と切支丹物 多声・交差・越境』<sup>6</sup> 収録論文）が報告されているが、該書にて「台湾における芥川」の課題を与えられた彭氏自身、その接点の少なさに困惑した感慨を吐露されている。そうした中で彼が目にしたのが、彼曰く台湾側からの唯一の資料たる『台湾日日新報』というわけだったが、残念ながら彭氏の調査は完全なものとは言い難い。ここではまず台湾と芥川の“唯一”の接点たる『台湾日日新報』上の芥川関連記事の実際についてその真相を明らかにしておきたい。

『台湾日日新報』とは何か<sup>7</sup>。以下、その歴史、意味について少しく紹介する。1896年6月17日、日本の台湾統治開始後すぐに、日本人による台湾最初の新聞『台湾新報』が台北にて創刊された。翌1897年5月8日には新たに『台湾日報』が創刊される。1898年3月28日、児玉源太郎台湾總督就任。4月29日には両紙を廃刊。そして5月1日から新たに『台湾日日新報』が創刊された（社屋は元台湾日報社跡に置かれた）。該紙は発行部数の上でも常に台湾島内第一を誇っていた。使用言語は

当然の如く日本語中心であったが、そこには当初から「和漢頁」が設けられ、会社内部に「漢文部」が設置されていたことは注目される。「漢文部」所属社員として、『支那詩論史』などで著名な中国文学研究者で後の京大教授 鈴木虎雄や後に日本で魯迅を指導する清末民初の革命家 章炳麟<sup>8</sup>の名前も見えていることは特筆されよう。また、台湾における主要言語の一つであった「漢文」（大陸中国語）をも採用したことに、島内の台湾人への発信（日本による教化）に総督府が真剣に取り組んだ形跡を確認できよう。1905年7月1日には、漢文を分離して新たに『漢文 台湾日日新報』が発行された。実際に紙面を繙けば、漢文版にも朝刊・夕刊があり、日本語版への併載とはいえ、独立した形をとっている。台湾での文芸活動における該紙の意義については、横路啓子が次のように述べている。<sup>9</sup>

（『台湾日日新報』は）最大手の新聞メディアとして台湾全島に配布された。同紙は台湾総督府の島内民衆へ向けて発する「府報」を組み込み、毎年多額の補助金を受けていたため、「御用新聞」という見方が強い。しかし、新聞という近代的な媒体そのものが民主的な空気をはらんでおり、書き手読み手ともに『台湾日日新報』を台湾総督府の単なる代弁者と見ていたわけではなかった。（……）管轄機関が許すであろうぎりぎりの範囲で、台湾島内で自由に文芸活動を行っている。

横路によれば、「御用新聞」と言いながら、当局から最も警戒されていた日本人台湾人合同の左翼雑誌『台湾文学』（1941-43）に掲載された評論を転載するなど、同紙の維持した自主性も看過することはできないようだ。日本の植民地統治最初期には、新聞雑誌などは官営のもの以外いまだほとんど発行されていなかった。そうした背景に鑑みれば、『台湾日日新報』（及び後に引く『台湾民報』）の「文芸」欄を仔細に繙くことは、当時の状況を垣間見られる数少ない重要な手掛かりと考えられる。就中、『台湾日日新報』「漢文版」は従来ほとんど研究対象として取り上げられたことはない。総督府の紐付きとは言え、「漢文（中国語）」により当時の台湾人に向けて発せられた数少ない媒体という点では、やはり看過されるべきでないだろう。

それでは、『台湾日日新報』掲載の芥川関連記事及びその周辺を実際に繙いてみたい。記事の中心は1927年7月24日前後、つまり当日未明に自宅にて多量の睡眠剤服用による芥川の自殺に関するものである。その当時の該紙の日中関係報道に目を注げば、山東半島問題や、満蒙関連など、満州事変前夜のきな臭い話題が散見されるが、日本の最大の関心はやはり中国における「北伐」の進行であった。かなり詳細な報道が為されている。一件のみ、芥川自殺の前日7月23日の記事を拾えば、次のようにある。

#### 昭和二年七月二十三日（朝刊 第二面）

「妥協などとは以つての外 すべては風説に過ぎぬ 蔣介石氏聲明」

【上海二十一日發】蔣介石氏は二十一日各機關を通じ（中略）軍閥討滅は國民運動の主要目的で之と和議を企てるは不可能であると附言した

以下、芥川自殺に関する記事を挙げていこう。まずは、前述彭春陽の先行論文に引用されるものから見てみよう。すべて日本語版に掲載されたものである（文中の「\*」は、不鮮明等による判読不可文字を示す）。

昭和二（1927）年七月二十五日（朝刊 第三面）

「芥川龍之助氏 きのみ逝去」

【東京二十四日發】文士芥川龍之助氏は本日東京府下田端の邸にて急病にて死去した（寫眞芥川氏）

ここに顔写真付きで掲載された30字足らずの第一報。「龍之介」が、芥川の嫌った「助」の表記になっていること、「自殺」でなく「急病にて」と記されることなども興味深い。以下、報道はより詳細になっていく。



七月二十五日（夕刊 第二面）

「芥川龍之介氏の死は自殺 睡眠薬を多量に嚙下して その最後は従容」

【東京二十五日發】近來の文壇中心人物として有名な芥川龍之介氏は二十四午前六時二十五分市外田端四三五の自宅階下八疊の書齋に於て睡眠剤プロナルを多量に嚙下して自殺を遂げた自宅に夫人フミ子（二七）長男宏（九つ）剛（七つ）安（五つ）の三男あり 遺族に對し百坪の土地と著作権貯金二千圓と僅かの著作を残した 尚芥川氏は數月前から死を覺悟して居たらしく死の前後は少しも變つた様子なく午前一時半頃二階で毒を仰いだことを夫人に悟られぬ様薬を夫人の前で嚙んだ程最後迄落著いて居た 急を聞き馳せ付けた霜島醫師は語る

カンフルを二回程注射しましたが何の反應も有りませんでした 睡眠薬を嚙んで熟睡した儘苦悶の後を見せて居ませんでした

「自殺の原因 小學全集の醜い争ひもその一つ」

【東京二十五日發】芥川氏が自殺を遂ぐるに至った原因は誰も知る事を得ないが氏が或舊友へ送るの手記と題して原稿して居るが同文中 氏が自殺を選んだ道程を物語つて居るものがある 自殺の動機は先頃問題となつて居る菊池氏と共同で計畫した例の小學全集が北原氏の兒童文庫と衝突し出版界の喧嘩となつた事に就て小學生に對して斯かる社會の争を知らせるのは忍びないとて爾來菊池氏等と面白からぬ感情を以て居た事と數年來肺結核に冒された事の二つが原因となつて神經衰弱に導き終に死に至らしめたものであると

「永い間 死の方法を研究して居た 久米正雄氏談」

【東京二十五日發】芥川氏の友人久米正雄氏は語る。六月中旬鎌倉で會つたのが最後でした 遺書にもある様に縊死も水死も出來ず長い間死の方法を研究して居た爲めか遺書等から見ればあの立派な死を病死とも発表されぬ 又詰らぬ臆測も困るから発表した

七月二十九日（朝刊） 第6面「文芸欄」

「文壇の明星 芥川龍之介氏逝く」

我文壇に確固たる地位を占めて常に傑作を發表してゐた芥川龍之介氏は二十四日遂に自邸で自殺を企てた 氏は二年前から既に之を覺悟してゐたと其遺書の中で言つてゐる 氏の藝術家としての價値に就ては今更云々するに當らない程勝れたる藝術家として認められてゐたのであつて芥川氏の死が我文壇にとって一大損失である 又氏の今日まで成し來つた文壇的功績乃至氏の死が現今の我文壇に及ぼす影響等を考へると吾々は言ひ知れぬ寂寥を感じずにはゐられない 氏の追憶に關しては既に報じたので此處に改めて記すことは止める 此欄に於て深き哀悼の意を表して置く

以上を、彭氏論文では芥川自殺関連記事のすべてとされるが、実際にはそのほかにも以下の記事が確認される。やはりすべて日本語版の頁から。長くなるが、資料的価値という意味から、基本的に全文を引用する。

### 七月二十六日（朝刊 第二面）

#### 「故芥川氏の追憶 作品の傾向—文壇乗出し當時の事（上）」

— 大學教授にして見たい — 之は嘗つて『文學雜誌新潮』の試みた『人間隨筆』欄で菊池寛氏が芥川龍之助氏を批評した言葉である。 ○

芥川氏は明治二十五年三月一日東京市京橋に生れた江戸つ子である 大正五年東京帝大英文科を久米正雄、成瀬正一、松岡讓氏等と共に卒業 作家として多くの作品を残して今日に至つてゐる ○

芥川氏の作品を其傾向から見る時は大體に於て五種類に分つことが出来ると思はれる『或日の大石内蔵之助』に依つて代表される心理解剖の作品『妖婆』に依つて代表される怪奇物語『鼻』に依つて代表されるユーモラスな作品『一塊の土』に依つて代表される生活的色彩の濃厚なる作品の夫である 尚此外に氏の趣味から來たものに所謂キリストンバテレンものである 之等を一貫して言へば所謂新技巧派の作品であらう 別な言葉を以て言へば氏の今日までの藝術は理知の藝術であり秩序の藝術であり又メカニズムの藝術であつた 従つて我々の其作品に對する感觸は金属的で峻冷的で固定である 然しさうかと思ふとユーモラスチックな所もないではない 氏の作品が一部の評論家に藝術至上主義であると言はれるのは前述したやうにメカニズムの藝術といった感觸を與へる傾きがあり過ぎたからである 又プロ作家から如何にもブルジュア藝術家らしく言はれるのは餘りに透徹した理知と上品で洒脱な機知と洗練された情緒と巧妙な筆致との閃めきがあつて一寸高踏的な感じを與へるからである 氏が如何なる理由に依つて文壇に乗り出したといふことは當時の文壇の状態及び文壇に動いてゐた自然主義文學に就て述べなくてはならないが夫れは餘りに繁雜になり過ぎるので極く簡単に言つて見れば大正の文壇は自然主義の全盛期を受けつた文壇であつて現實暴露を笑つた身邊雜事の小説が一番の主流であつた様に想はれる 此の中にあつて右に述べた様な芥川氏の作品が出たのは異色と言はざるを得ない 而も此の親分夏目漱石が文壇に於て稀有の地位を占めてゐて次々に現はれる芥川氏の初期の作品の眞價を認めたからであらう 漱石が認めた初期の作品は主として『新思潮』に現はれてゐるので『新思潮』に就て言つて見たい 小山内谷崎潤一郎氏等の第二次『新思潮』の後をうけて大正二年から同三年にかけて第三次『新思潮』を芥川龍之介、久米正雄、山本有三、豊島與志雄、山宮充、菊池寛氏等が同人となつて發行し次いで大正五年芥川、久米、菊池、松岡讓、成瀬正一氏を同人として第四次の『新思潮』を出したのである 此の第四次『新思潮』の一號が二月に出て其の中の芥川氏の『鼻』と云ふ小説が夏目漱石に認められて遂に其の年の九月の『新小説』に出世作『芋粥』を發表して一番早く文壇にみとめられる様になつたのである（一記者）

### 七月二十六日（朝刊 第五面）

「芥川龍之介氏の死は 我文壇の一大損失 「一緒に死んでくれる程の友をもたぬ」と……手記中になげく」

【東京二十五日發】自殺した芥川氏は大正三年東大文科卒業生で第三期新思潮に投稿した時より文壇に認められ内外の文學に通曉し稀に見る大文學者で又作家として風靡してゐることは人の



よく知る所である 兎も角我國文學界の一大損失である **なみだや はなの先だけ暮れ残る** 之れが芥川氏の辭世である 之れをかゝりつけの下川醫師に自殺の前夜夫人をして送らしめんとしたが何故か夫人の出足を留めて翌日に延ばさせた 夫人も不審に思つたが翌日は飯沼に避暑に行くことになつてゐたので思ひ直したと夫人は涙乍らに語つてゐた 又手記の一節に『クライス』は彼が自殺前度々彼の友人(男)に道伴れになることを勧誘し『タダジーン』も『モリエー』も『ボアールド』も一緒にセーナ河に投身し様とした 然し僕には何處にも之れと云ふ友達を持つてゐない 唯僕の知つてゐる女人は僕と一緒に死なうとしたとある此の女人と云ふは文子夫人であると言はれてゐる

「遺書を讀上る久米氏 泣きながら聽く菊池寛氏 遺書に 自殺は罪惡とは思はぬ佛陀もこれを肯定した」

【東京二十五日發】芥川氏が生前親しかつた久米正雄、菊池寛、久保田萬太郎諸氏は二十四日朝來同邸に駈付け大混雜を呈して居るが久米氏が記者團に對し手記を朗讀したが聲さへ震へた 俯向いて見てゐた菊池氏は涙に目を泣腫してゐた

芥川氏の遺書或る舊友に送るの手記の書出し

誰も自殺者の心理をありの儘書いたものはない されば自殺者自身の自尊心や彼自身に對する心理的性格の不足に依るものである 僕は此の心理を君に傳へたい 君は新聞の三面記事に依り生活苦病苦其他自殺の動機を發見するだらう 然し僕の體驗に依れば之は動機迄の道程である **僕は二年程前から死の事ばかり** 考へた(中略)第一僕が考へたのは如何にせば苦しまずに死ぬるか云ふ事だ 溺死も水泳の出来る僕は目的を達する事は出来ない 萬一出来るとしても縊死も溺死も僕には不得手だ ピストル、ナイフにしては手が震へて失敗の可非性を持つてゐる ビルディングの上より飛降りるのは見苦しい 僕は此等の事情から薬品を用ゆる事とした 之は苦しいだらうが蘇生する危険は有つてゐない(中略)僕の家族達は僕の遺産に依らねばなるまい 僕が死去つた後僕の家にあられない事を苦にした 従つて別荘の一つもある **ブルジョアの羨ましさを感じた** (中略)僕は紅毛人達の信ずる様に自殺を罪惡とは思はぬ 佛陀は露はに教養の中に彼の悲痛な自殺を肯定してゐる 曲學阿世の徒は此の肯定の已むなき場合の外は誰と言ふであらう 然し第三者の眼から見て止むを得ないと言ふのは見す\* \*より悲慘に死なねばならぬ

### 七月二十六日(夕刊 第二面)

「芥川氏告別式 文藝家葬の形式で」

【東京二十六日發】田端の芥川邸は二十五日は朝來弔問の名士で大混雜を呈して居たが告別式は二十七日午後谷中齋場で關係深き出版業者の寄附金で文藝家葬の形式で行ひ愛讀者と悲しみを共に分つことに決定した

### 七月二十七日(朝刊 第二面)

「故芥川氏の追憶 (下)」

氏の隨筆は文壇に於て定評あるもので我鬼とか澄江堂といふペンネームで數多く發表してゐる 文藝の士は元より文學を志す者は是非とも一讀しなくてはならないものばかりで一面俳人としても一地歩を占めてゐる氏の趣味と言へば書畫骨董、\*書、南蠻もの支那ものである 氏の創作群は記憶してゐるものだけでも羅生門、傀儡師、影燈籠、夜半の花、支那游記等々氏が南蠻もの通であつた 一\* \*を述べて見やう 小説『奉教人の死』を發表したとき

予が所蔵に關る長崎\* \*會出版の一書\*して『れげんだおうれあ』といふ…上卷の扉には羅匈

字にて署名を\*書しその下に漢字にて「御出世以來千五百九十六年、\*\*二年三月上旬鏤刻也」の二行を\*書す年代の左右には喇叭を吹ける天使の畫\*ありなどと註記して南蠻趣味の好事家を驚倒せしめたのは名高い話である。之は單に芥川氏のトリックでそんな本はないのであつたので有名な古書通内田魯庵氏に\*\*を申込まれて困つたといふことだ ○

話は前に戻る、菊地寛氏をして『大學教授にして見たい』と言はしめたのは氏が文壇第一の勉強家であり氏の文學的才能が大學教授に相應しいからである。厨川白村氏があの大地震で無残にも逝去され京大英文學教授に空席を生じたとき芥川氏をその後に\*ゑては如何と紙上に發表せしめた程である 氏は最近室生犀星氏と心境相通ずるものがあつてか交際してゐた様である 氏は文壇\*有名な神經衰弱で\*\*\*\*まされた人で此度の自殺は夫れが嵩じたのにも原因するのでなからうか 芥川氏の死は我文壇にとって一大損失である 最近氏が社會思想にも留意し初めたといふことを聞いてゐたので氏の作品の傾向が今後如何なる方面に移つて行くかといふことは多くの人々の期待してゐたことである 尚氏と河童に就ても述べて見たかつたのであるが紙面の都合に依り以上で筆を擱く（一記者）

このように、日本語にて、台湾在住の日本人向けに、人気の高かった芥川龍之介逝去が大きく取り上げられるのは当然の成り行きだったと言えよう。残念ながら、記事の内容にしても、内地（日本国内）での報道との差違は認められないようだ。

ついでに、芥川自殺関連のニュースとして、相次いで後を追ったファンたちの記事を引いてみたい。前後に三件認められるが、彭氏論文に言及のない一件を挙げておこう。

#### 七月二十八日（朝刊 第五面）

「三越の七階から 飛降り自殺 芥川氏を崇拜の青年 氏の自殺から憂鬱病に罹つて」

【大阪二十七日發】二十七日晝頃大阪市高麗橋三越呉服店七階高さ八十尺の箇所より街路目がけて飛降り自殺した男あり 取調の結果鹿兒島県奄美大島生れ岡本\*\*（一九）と判明した 原因は豫て芥川氏を極端に崇拜してゐたが氏が自殺して以來憂鬱病に罹つてゐたが終に自殺を圖つたものらしい

彭氏が引く残りの二件はいずれも「モガ」の後追い自殺であつたが、若き文學青年にもその影響が及んでいたことには少々驚かされる。

さて今回、「漢文版」正確には『漢文 臺灣日日新報』の方にも芥川に関する記事を新たに二つ発見することができた。以下にその記事の全文を挙げてみよう。

#### 昭和二年七月二十六日（『漢文 臺灣日日新報 朝刊』）

「著述家 芥川氏 自殺 文壇失一巨星」

據二十五日東京電。著名之文壇中心人物。芥川龍之介氏。二十四日午前六時餘。服多量睡眠劑。于其書齋。自殺。僅留些少著述及地百坪。著作權貯金二千圓。于其夫人（二七）及長男宏（九）次男剛（七）三男安（五）等遺族。

▲芥川氏自數月前便有死志。然自殺之前夜。仍絲毫無稍異。午前一時半于樓上服毒。至最後瞬間尚讀聖書。故其夫人全不悟據霜島醫師云。注射二回。皆無反應。如服睡眠藥。熟睡之狀。全不見其苦悶也。

▲ 氏自殺原因。據其所送與其舊友。手記原稿。有氏研究自殺方法之異語。其自殺動機。蓋為與菊池氏共同所著小學全集。與北原氏兒童文庫衝突。一時喧動出版界。以後與菊池氏等感情。漸不佳。故自數年來便罹肺結核。神經衰弱。至于死。

▲ 久米正雄。菊池寬久保田萬太郎諸氏。為氏生前故友。二十四日齊馳到其宅。久保氏對記者團朗讀其手記。至悲痛不能成聲

▲ 氏為大正三年。卒業東大文科。自第三期新思潮投稿之際。便蜚聲文壇。且通曉內外文學。為稀見大文學家及著作家。風靡文壇。人所共認。其死也本邦文學界可謂一大損失



七月二十九日〔漢文 臺灣日日新報 朝刊〕

「芥川氏文藝告別式」

芥川氏之告別式。本日午後二時起。在谷中齋場執行文壇之入多數參與。有文藝葬之觀。四時閉式。(東京二十八日發)

基本的に日本語版記事の内容を踏襲したもので、やはり台湾から(或いは台湾へ)の何らかのメッセージを読み取ることはできないが、意識して台湾人に向けて発せられた「漢文版」に掲載されたことは意義深い。この二つの記事は、少なくとも自殺に関する限り、当時台湾のメディアに「中国語」にて記された唯一の芥川龍之介関連のニュースであったかもしれない。

三

さて、以上見てきた『臺灣日日新報』は主として日本側の視点を反映したものであったと考えられる。では、台湾側の視点はどうかであったか。台湾の人は芥川ひいては日本近代文学に対してどのような意識を有していたのか。ここでは一つの端緒として、「該報為三百五十萬漢人唯一的喉舌」(楊肇嘉「臺灣新民報小史」)<sup>10</sup>と位置付けられる『台湾民報』を取り上げたい。1920年に進歩的青年たちによって東京で創刊された『台湾青年』は1923年4月に『台湾民報』へと発展(1930年に『台湾新民報』と改称)、1932年4月の満州事変前夜、当局による弾圧が激しさを増す中でその命脈を絶たれるまで、一貫して台湾の言論の中核を担い、新文学の形成に多大な影響力を持った。『台湾(新)民報』は「御用新聞」『臺灣日日新報』に対峙する存在として、(用語は基本的に中国語であったという意味でも)極めて重要な位置を占めている。葉石濤『台湾新文学史稿』(1987年)には、次のように記される。

二〇年余りの期間、『台湾新民報』は終始台湾民衆の本音を代表した刊行物であると同時に、台湾新文学運動の根拠地であり大本營であった。それは台湾人作家に作品発表の場を提供し、

また新文学運動の中に相次いで起こった時代的・社会的意義に富んだ論争——白話文の提唱、新旧文学論争、台湾語文建設論争、郷土文学論争などにその場を提供した。その他にも、大陸の文学の転載、五四文芸思潮の分析、日本や欧米作家の紹介や翻訳、世界文芸思潮の移入などで、民衆を啓蒙し、民族精神を朽ちさせないという歴史的使命を保持した。<sup>11</sup>



大陸中国における五四文学運動の影響を受けて1920年代前半から台湾でも模索された新文学運動の時期には、該紙上にも胡適や魯迅等々大陸の代表的作家の論文、作品が少なからず掲載されている。北京師範大学に留学した台湾知識人で作家の張我軍や、台湾新文学の父（或いは「台湾の魯迅」と称される代表的作家の頼和らが編集を担当したことで、該紙は台湾の文学運動に深さと奥行きを与えたのである。葉石濤はここで「日本や欧米作家の紹介や翻訳」が行われたと言うが、管見の限り、十三年に及ぶすべての紙面に、芥川（龍之介）の文字は一つとして探し当てることはできなかった。芥川文学の翻訳や評論は言うに及ばず、『台湾日日新報』にてあられなく掲載された自死のニュースすら一切辿ることはできない。実は、1923年8月1日付紙面には「有島武郎情死」に関する評論が掲載されている。同じく自裁によった人気作家有島武郎の死は当時（日本とそして芥川を重視した中国の文壇においても）芥川の死と比較されて注目を浴びている。だが、1927年の芥川死去前後にも関連記事は全く見られないのである。

ただそのことに関しては、『台湾民報』自体の事情が絡んでいたふしがある。『台湾民報』は創刊当初から本社を東京に置き、内地から発信されていたが、1927年に当局の許可により念願の台湾島内での発行（台北市下奎府町に本社移転）が可能となった。当時週刊であった『台湾民報』の島内発行第一号は、同年8月1日発行第167号である。台湾（人による台湾のため）の新聞の台湾発行実現（無論、当局による検閲は従来通りの厳しいものであったが）と本社移転に関するニュースに、その前後の紙面は沸き立っている。その時期とはつまり、同年7月24日の芥川逝去にピタリと重なっていたのである。日本人人気作家の自殺といった彼らにとって“小さな”ニュースは、掲載の機会をますます失ってしまったかもしれない。そして象徴的なことに、芥川死去後最初の発行第167号から、『台湾民報』に“ついに”「和文」欄が出現することになるのである。

当時の紙面を仔細に繙けば、この1927年辺りから頁上の白抜きつまり当局の検閲による削除欄が急に増えてきていることがわかる。「全文削除」も頻繁に行われ、時局の緊迫、総督府の台湾人に対する締め付けの激しさが如実に窺われる。そうした中、文学関連の記事も徐々に見られなくなり紙面は明らかに「政治」化していく。台湾における新文学運動の根拠地も、次第にその役割を変化させていかざるを得なかったのである。

芥川に限らず、『台湾民報』上では日本近代文学に関する記事が極めて少ない。実は十三年に及ぶその歴史の中で、中国語翻訳によって紹介された日本の作品は、管見の限り、三篇のみであった。その三篇は次の通り。

1925年8月2日及び9日の二回連載

加藤武雄著・周作人訳「郷愁」（原載：1919年2月『文章倶楽部』）

1926年2月28日及び3月7日の二回連載

武者小路実篤著・張我軍訳（附：引言） 戯曲「愛慾」（原載：1926年1月『改造』）

1929年5月12日、19日、26日の三回連載

松田解子著・張資平訳「礦坑姑娘」（原載：1929年1月『戦旗』<sup>12</sup>。原題は、「A 鉱山の娘」）

十三年間で僅か三篇と極めて希少な日本文学の紹介であり、その選択にも統一性などは全く感じられないが、三篇それぞれ興味深い点を有している。まず、加藤武雄著・周作人訳「郷愁」とは、大陸中国で最初に出版された日本近代文学の精選集として極めて重要な意義を有する魯迅・周作人編訳『現代日本小説集』（1923年6月、上海商務印書館）収録作である。大陸で紹介された二年後に『台湾民報』は如何なる意図をもってこの作品を台湾にも導入したのであろうか。農村文学や少女小説などで著名な通俗小説作家、加藤武雄（1888-1956）は、戦時下では戦意高揚小説も書くなど、生涯「通俗」の桎梏から解き放たれることはなかったが、周作人が注目し、また『台湾民報』にも登載された1920年代には日本においても非常な流行を見ている。「郷愁」は、幼くして母を亡くした少女の郷愁と其の死、そして父親や周囲の者たちの悲しみを淡々と綴った佳篇である。

武者小路実篤（1885-1976）の戯曲「愛慾」は、台湾新文学を牽引した張我軍の翻訳ということ、まず注目される。1925年12月には台湾最初の新詩集『乱都之恋』を出版、当時『台湾民報』の編集者として張我軍が極めて旺盛な文学活動を行っていた中での翻訳である。厨川白村『近代の恋愛観』や西欧文学理論からの影響、そして当時まさに自身が自由恋愛による結婚を全うした張我軍が、いびつとは言え武者小路らしい純心な男女の恋愛（悲劇）を描いたこの作品「愛慾」を選択したのも自然な成り行きだった<sup>13</sup>かもしれない。彼は、翻訳連載の冒頭に「紹介武者小路氏大作「愛慾」引言」と題して次のように書いている。

武者小路先生、名實篤、年四十歳。他是日本第一流の創作作家、日本有了這位創作作家、在世界性的文壇、便可以爭到一個地位、這是我敢斷言的。他並且以「新村」的建設者著名。

我所讀日本作家的作品、未嘗受過如讀他的作品那樣大的感動。（中略）「愛慾」是一篇戯曲、登在改造新年號。他這篇大作一出、東都文藝批評界、齊筆稱讚不已。

（中略）

我現在要將這篇翻譯、登在民報學藝欄、願我同胞平心靜氣地來和這篇接觸。

（拙訳：武者小路先生、名は実篤、年は四十。彼は日本における一流の創作作家で、日本にこの作家ありてこそ、世界の文壇においてもしかるべき地位を争うことができると、私はあえて断言する。彼はさらに「新村」の創設者としても著名である。

私が読んだ日本作家の中で、彼の作品を読んだ時ほどの大きな感動を受けたものはいまだかつてない。（中略）「愛慾」は一篇の戯曲で、『改造』新年号に掲載された。彼のこの大作が登場するや、東都（東京）の文芸批評界は一斉に称賛してやまなかった。

（中略）

私はいまこの作品を翻訳して、民報の学芸欄に掲載するが、我が同胞が心を落ち着け冷静にこの作品と接するよう願っている。）

張我軍がここで、周作人が全面的に賛同を示し（北京支部まで作っ）た武者小路の「新村」運動

に言及することから、作品選択の上にも、張我軍が北京で直接教えを受けた周作人の影響が窺われる<sup>14</sup>。実は、張我軍の『台湾民報』編集就任は1925年初頭であり、加藤武雄著・周作人訳「郷愁」の掲載にも張我軍が関与していた可能性が高い。ただ、「愛慾」が日本の文壇において一定の反響を呼んだのは確かだが、実際の文学価値はそれほど高いものではない。鳴り物入りの紹介にもかかわらず、『台湾民報』（掲載当時は週刊）たった二回の連載で打ち切りとなったことから、読者の反響がはかばかしいものでなかったと想像される。ただ、この張我軍の武者小路に関する論評は、『台湾民報』の上で台湾人によって語られた唯一の日本近代文学に対する評価であった。其の意味は看過されるべきではないだろう。

さて、最後の一篇、松田解子著・張資平訳「礦坑姑娘」について。訳者の張資平は日本留学中に郭沫若や郁達夫、成仿吾らと創造社を立ち上げた、五四新文学運動の初期からその中心で活躍した作家であるが、後に墮落した「三角恋愛」小説家として魯迅などからも批判を浴び、さらには抗日戦期の日本への協力行為により戦後は漢奸として排斥されたことは周知の如し。だが、ここに彼の訳した松田解子（1905-2004）とは、恋愛小説とはほど遠い、当時最先端のプロレタリア文学作家であり、翻訳作の「礦坑姑娘」も、極貧家庭に生まれた少女が男に混じって鉱山に潜り、その精神と身体を徹底的に搾取される悲惨な物語である。自身炭鉱に生まれ過酷な現実を目の当たりにした松田は、小林多喜二や宮本百合子らプロレタリア作家と行動を共にし、弾圧された後も晩年に至るまで女性問題や社会における差別、労働問題に取り組んだ筋金入りの反体制作家であった。この張資平訳「礦坑姑娘」は、1928年8月10日『創造月刊』2巻1期に掲載されており、『台湾民報』に転載されたものである。実は張資平はこの時期、葉山嘉樹や藤森成吉ら日本のプロレタリア文学作品を集中的に翻訳発表していた。彼の活動がどういう経緯で台湾へ知られたのか、台湾の左翼文芸運動と如何に繋がるのか（繋がらないのか）、また、大正末期から昭和初期に全盛を迎えた日本のプロレタリア文学が留学生らを通して台湾に多大な影響を与えたことは周知で、のちの中核雑誌『台湾文芸』や『台湾新文学』などにもその痕跡が鮮明に刻まれるが、そうした系譜の中で松田解子翻訳がどのように位置付けられるのか<sup>15</sup>等々、課題は少なくない。

いずれにしろ、『台湾民報』紙上における日本文学の紹介に当たって、張我軍が中心的な役割を果たしていたことは疑いない。張我軍の魯迅等を始めとする大陸中国の新文学を台湾に紹介したことは一貫して注目されてきたが、日本近代文学紹介についてはほとんど言及されたことはない。そのことを考察する上で、陳芳明の『台湾新文学史』（2011年）にも見える台湾本土思想からの次のような解釈も忘れてはならない。

歴史の発展の跡を振り返れば、張我軍の貢献は否定すべくもないが、それでも時代のもたらす限界があった。張我軍は中国文学が本流で、台湾文学はその支流であるから、本流に変化が生ずると、支流にも影響が及ぶと主張した。ところが自説を述べる際に、台湾が植民地社会に属している事実をまったく見落としていた。植民地の台湾の発言権は、日本人に完全に掌握されていたので、教育から新聞に至るまで外来の植民者に牛耳られていたのである。このような文化的環境を、当時の中国社会と同列に論ずることは、根本的に無理がある。<sup>16</sup>

さて、上記三篇の日本文学作品が掲載されたのは、いずれも1920年代であったが、その後30年代に至ると、前述したように当局の抑圧のもとで『台湾（新）民報』は次第に「政治」化を来し、かつての文芸面での光が失われつつあった。そうした背景のもと、1934年に全台湾の作家を網羅した台湾人による文芸団体、台湾文芸聯盟が成立し機関誌『台湾文芸』が創刊された。1935年7月1日

『台湾文芸』2巻7号の「二言・三言」欄には、次のような言葉が見えている。

新民報の學藝欄ますます淋し。かつて島の文藝の唯一舞臺であると誇る榮譽今や何處に？  
かなしい哉！。

ふと漏らされたこの感慨からも、新聞『台湾新民報』が文学を志す当時の知識人たちにとっていかに重要であったか改めて窺い知れる。実は、同様の感想は、日本人の口からも吐露されていた。河崎寛康「臺灣の文化に關する覺書（二）」（1936年2月『台湾時報』195号）より引用する。

臺灣の日刊新聞の方針を見て一番諒解に苦しむのは、本島人の手になる唯一の日刊紙「臺灣新民報」が文藝問題に全く無關心で、相當多數の本島人文藝愛好家に一顧も與えない事實である。臺灣に於ける文學の主流が本島人を中心としたものである以上、本島人の手になる最も強力な發表機關であり文學に十分の活動舞臺を與へるべき新民報がこれについて無關心であることは、新聞經營者の頭腦が疑われるものといはねばなるまい。（中略）いづれにしる臺灣の文化的發展に最も有力な舞臺を與へ得るものは臺日（引用者注：『臺灣日日新報』）と臺灣新民報である。前者は臺灣に於ける支配的要素たる内地人の文化的水準を高め、内地中央の文化的情勢を傳へる點に於て有力な立場を有し、後者は廣汎なる本島人大衆の文化的發展の最強力のモメントとなり得る。

兩紙が臺灣文學の發展に關する自己の役割を理解し正しき方向に立向ふ事は、新たな飛躍を前にした本当の文學運動にとつて強力な拍車となるであらう。<sup>17</sup>

当時、日本人の側にもこのような冷静な觀察眼が存在したことは注目される。当時の台湾は、台湾でありそして「日本」でもあった。台湾人と日本人、そして言語が錯綜した中で、台湾の文芸界は、新たな局面へと舵を切っていくことになる。

#### 四

錯綜した言語状況については、陳芳明『台湾新文学史』が分かり易くまとめてくれているので、まずはそれによって全体像を確認しておきたい。

注意すべきなのは、台湾が植民地に陥落した後、作家の言語選択に深刻な戸惑いが生じたことである。いったい古典漢語を使うべきなのか、中国白話文を使うべきか、あるいは台湾語を使うべきか、それとも日本植民者の言語を使うべきなのか、という迷いである。新文学が発足してからも、作家たちが各々異なる言語で文学創作に取り組んでいるのが見てとれる。謝春木は日本語を使い、張我軍は中国白話文を使い、頼和は台湾語を取り入れるといったように、植民地文化の渾然とした様相を形成していった。（中略）清代の移民社会においては、漢民族が使用する言語が最も優勢で行きわたっていた。日本の統治後、言語問題はすぐに敏感な政治問題になった。なぜなら漢語はもう優位を保てなくなり、徐々に日本語に取って代わられていたからで、新文学が登場するところになると、日本語教育は台湾で実施されてすでに四半世紀になろうとしていた。これほどの長い年月を経て、島内の住民は日本語で考え表現する習慣を身に付けつつあった。それは文学者にきわめて大きな苦悩をもたらした。新文学運動の目標は、ひと

つは植民地化を食い止めることであり、もうひとつは時代遅れになった伝統文化を批判することであったので、台湾の作家は言語の問題において自分の立場をどのように定めればよいのか困惑した。<sup>18</sup>

一貫して日本語を拒絶した頼和（1894-1943）の世代と、実質的に『台湾新民報』の後を継いだ『台湾文芸』『台湾新文学』を代表する作家たち、楊逵（1905-85）や張深切（1904-1965）、黃得時（1909-1999）といった世代の間には20年の開きがあり、陳芳明の指摘する「言語の問題」は不可避の現実として深く根を下ろし始めていた。そうした状況下、新世代の作家たちは、実質的に日本語を許容していくことになる。“祖国”の「白話文」を使用すること自体に価値を求める傾向は、上記の雑誌の上に認められるが、誤解を恐れずに言えば、新世代の彼らにとってはいずれの言語を用いるかということよりも、実際に台湾文学の水準を上げていくこと自体が目前のより重要な課題であった。

楊逵は、1934年12月18日『台湾文芸』2巻1号に掲載した「一九三四年の回顧」と題する文章の中で、次のように述べている。

我々の批評はもつと高い観点から下されねばならぬ。我々は先づ第一に、作品のテーマの社会性を究め、そのテーマの生かされた程度を究め、而して後、該作品の不自然の點、矛盾せる點を指摘すべきではなからうか。

当時の（特に島内の）台湾文学が希求したのは、社会との対峙、文学を通じた現実変革への期待であった。当時の作品を繙けば、直接批判は叶わなくとも、日本植民地下で搾取され蹂躪され、生きていくことすら困難なそうした民衆の悲惨な生活が克明に描かれている。

一方で、内地日本から台湾文学へ多く期待されたのは、日本にはないそのエキゾチズム（台北帝大教授、島田謹二は「エグゾチズム」と呼んだ<sup>19</sup>）であった。1935年12月28日『台湾新文学』創刊号には、「台湾の新文学に所望する事」と銘打った内地の日本人からのアンケートを集中的に掲載している。左翼系作家からの意見には「世界文学」の一環として独自の発展を遂げるべしとの言葉も散見されるが、内地にない光景や風土、事物を描いて、日本文学に新たな風を吹き込んで（日本人に新奇なる景色を提供して）欲しいという、西洋のオリエンタリズム的発想のものが過半を占めている。こうしたアンケートを募ること自体、日本文壇との融合への意志、悪く言えば諂いの色彩を窺うことができようが、台湾の作家たちの多くが内地中央の文壇を目指していた状況の下、日本からの視線を無視することもできなかった。例えば1935年2月1日『台湾文芸』2巻2号には、次のようなコラムが掲載されている。

お知らせ

一九三五年劈頭に於けるうれしい消息。

牛車（文學評論一月號掲載） 呂赫若

父の顔（中央公論佳作） 張文環

こうした内地への憧憬、現実的な利害が、日本語創作をいっそう後押ししたことは想像に難くない<sup>20</sup>。だが、台湾文学の底上げはなかなか容易には進まなかった。1936年11月5日『台湾新文学』1巻9号の「編集後記」（楊逵執筆）には、次のような言葉が書き付けられている。



△最近又頻りに臺灣の作品は下手で雑誌は幼稚だから読み度くない。それより内地の雑誌を読むのだとの聲を聞く、尤もである。幼稚や下手は誰しも容認出来ない。だが自分の文化に関心を持つ人はもつと親切であるべき筈だ。内地や中國のものは自分の参考にこそなれ決して自分のものではない。(……) 徒に中央文壇や外國文學に眩惑されることよりは自分のものを良くしやうではないか。

内地の渴を癒やすようなエキゾチックな世界に傾斜するか、台湾独自の道を力強く歩んでいくか逡巡する、そうした状況下、純文学、分けても文学的技巧を追求した芥川龍之介の文学は、当時の台湾文学界が目指すものとはおそらく最も遠い地平に位置していたと想像される。中国語にて翻訳紹介されることを望み得ないばかりか、その作品自体が台湾文人たちの意識にも上らなかったであろうことが推測されるのである。また、台湾の文芸紙誌の上に外国文学の紹介が極めて少ない事実についても、こうした台湾の特殊事情が関係していたことが窺い知れる。

そして、1937年4月以降、台湾総督府の漢文使用禁止令公布により、台湾の作家は日本語以外の筆を奪われてしまう。台湾文壇は、その創作、鑑賞の能力を十分に成熟させることのできぬまま、漢文(白話)による文学の道を絶たれてしまったのである。だが実際には、その前から新世代の作家たちは既に日本語を選び取っていた。芥川或いは日本の近代文学作品が台湾にほとんど翻訳されなかった背景として、最後にそのことを確認しておきたい。

東京留学生によって1933年に真の「台湾人の文芸」を標榜して発刊された雑誌『フォルモサ』、その創刊号には、楊行東(1909-87)の「臺灣文藝界への待望」が掲載される。

臺灣文藝!! それは取りもなほさず臺灣と言ふ特殊なる存在からの自らなる表現であり、今のわが臺灣の文化創造に貢献し得る精神力のある文學であり、文藝であらねばならぬと思ふ。(中略) 他人の表現してくれた、臺灣を背景とする文藝も傑出したものはあらう。然しさうしたものは眞の意味の臺灣文藝ではないと観ずる。吾らは斷じて言ふ。眞に透徹した意味に於ける臺灣文藝は臺灣といふ存在の中に絶えざる努力の生を切り抜けて來た者の、自己の姿の觀照に、泣き、笑ひ、さざめくその生まれぬ叫びから生れ生づるものであると。(中略)

和文の文藝的表現! これはわれらの將來の最も大いに活躍すべき唯一の武器である。特殊事情のもとにある臺灣、その文藝も又ここに始めて偉大なる著作、創作が生れ出るであらう。現在の處未だ模倣的なものに過ぎぬ觀なきにしもあらぬ、然し既にかなりの成績と活躍を見てゐるのだ。否將來の眞の文藝的分野は恐らくこの圈内にのみ屬することになるかも知れない、われらは此處に和文の徹底的理解とその創作への充分なる發明あらんことを必然的な迄に期待して止まないものである。小説、詩文、評論、……すべて大に之によるべきことを認める。

内地の首都東京にて文学を謳歌していた留学生たちの、台湾文芸創出への熱い想いは伝わってくるが、台湾島内にて一貫して白話文(台湾語文)の筆を執った頼和らとの大きな分岐は如何ともし難い。だが彼らは日本語という強力な武器を通して、創作ばかりでなく、世界の文学と触れ得ることにもなった。そして、彼らは確実にその「日本語」を通して、芥川を含む日本文学の伝統をも吸収消化していったのである。

葉石濤(1925-2008)の回想文「日據時代新文学作家的文学教育」<sup>21</sup>からは、その様子がありありと窺える。

從公學校高年級開始我才真正踏入日本近代文學的堂奧。我閱讀的範圍頗廣，從明治初期的尾崎紅葉、泉鏡花、一直到大正時代的芥川龍之介以致昭和時代的川端康成等，幾乎讀遍了整個日本近，現代文學作家的作品。(中略)中學裡的圖書館有豐富的藏書，借閱方便。(……)有大部頭的叢書如日本作家全集或世界文學全集之類，可以讀遍日本及外國重要的文學經典之作。中學圖書館室的藏書很快就借閱殆盡，我不得不在台南市立圖書館看書。(……)我每天放學回家，總是在圖書館閱讀兩、三小時的書。圖書館裡的文學書，雖在太平洋戰爭中也毫無禁忌的讓人閱讀英、美等當時日本的交戰國家的作家的作品。

(拙訳：公学校高学年になってから私はようやく日本近代文学の深遠なる境地へと本当に足を踏み入れた。私の読書範囲はとても広く、明治初期の尾崎紅葉、泉鏡花から、大正時代の芥川龍之介さらに昭和の川端康成にまで及び、ほとんどすべての日本近・現代文学作家の作品を読破した。(中略)中学の図書館には豊富な蔵書が収められ、借りて読むのも便利だった。(……)日本作家全集や世界文学全集といった大部の叢書もあり、日本と外国の重要な文学經典を読破することもできた。中学の図書室の蔵書はすぐにほとんど読み尽くしてしまったので、私は台南市立図書館で読書せざるを得なかった。(……)私は毎日学校が終わって帰宅すると、きまって図書館で二、三時間本を読んだ。図書館の文学書は、太平洋戦争のさなかであっても、全く禁止されることもなくイギリスやアメリカなど当時日本と戦争していた国の作家の作品も読むことができた。)

図書館で芥川や川端の小説を原文の日本語にて耽読するこの文学少年を捉えて、「中国における」「アメリカにおける」と同様に、「台湾における」芥川文学受容と見なしてよいものかどうか。30年代以降の台湾の文芸誌では、多くの台湾人筆者が日本を「わが国」と呼んでおり、彼等の意識の中で、自身が台湾という南方に居住する「日本」人だという意識が確実に存在したことも考慮すれば、その問題設定の難しさがより鮮明になる。それを「外国」文学としての日本文学受容と設定すること自体不分明であり、「台湾を考えるむずかしさ」<sup>22</sup>がここにも露呈している。もちろん、客観的に地域としての台湾と考えるならば、そこに無理はないだろう。だがその場合逆に、日本人を媒介とする受容や、さらには「在台」日本人をも「台湾」の一部として対象化することが可能になるかもしれない。

## 五

1935年5月5日刊『台湾文芸』2巻5号に、森次勲「中国文壇的近況」という中国語「白話文」の論文が掲載されている。訳者の頼明弘の附記には次のようにある。

中國文學是臺灣文學的母體：也是有著不解之緣。攝取消化中國文學之精粹，是我們的共通欲求。可惜！近年來我們離開中國文學太遙太遠了，因為種種的情勢。……(本篇譯自文藝四月號)  
(拙訳：中国文学は台湾文学の母体であり、そこには分かれ難い縁がある。中国文学の精華を摂取し消化することは、我々に共通の欲求だ。惜しむべし！近年種種の状況により、我々は中国文学から遥かに遠ざかってしまった。……(本篇は『文芸』四月号より訳出した)

ここに見える通り原文は『文藝』(改造社)1935年4月号掲載、森次勲「支那文壇この頃」である。頼明弘の翻訳に特に問題は感じられないので、ここでは日本語原文から引用する。

一般に沈滞的、反動的な空気の中に包圍せられてゐるに係らず、一聯の傑れた作家達の間にも等しく、プロ文學の影響が少なからず看取せられる點である。(中略)

これに對して文學至上主義の純文學派の流行的傾向も明白に存在してゐる。彼等は、相當活發に世界文學の翻譯、研究を行ひ、特に日本からの影響が依然として少くない。日本留學の新人らが、日本の問題を逸ち早く支那(頼明弘は「本國」と訳す：引用者注)にも、持つて來るのである。又、芥川や、啄木、漱石、藤村、直哉等の愛讀者も多い。但し、これらの人々は、要するに模倣であるがために、——或ひは模倣の範圍から出る事が出来ないがために、創作としては、我々の注意を捉える程の傑れたものを殆んど産み出して無い。

(二、二八於上海)

雑誌『台湾文芸』など台湾人のための文學創出に中心的存在として積極的に取り組んだ頼明弘は、「中国文學は台湾文學の母体である」と公言し、日本語原文に見える「支那」を(矛盾を承知で敢えて)「本國」と置き換えるなど中国への帰屬意識を表明しながらも、その「母國」大陸の文壇状況すら、中国人でも台湾人でもなく、わざわざ内地の雑誌に日本語で掲載された日本人のレポート(を中国語訳)によって台湾に紹介するという迂遠な道を選択する。そこには1935年という時代的な複雑さも介在しているようだが、見てきたような日本(の學術文化)への憧憬や、日本語を媒介とする習慣が当時の台湾に根付いていたことを改めて感じさせる。そしてそこに日本人が解説する通り、停滞する中国文壇の中国人作家による模倣の対象として、台湾の知識人たちは芥川や漱石を認識したのであろうか。

さて、(台湾)国家図書館の検索サイト「日治時期期刊全文影像系統」は、結果をすべてPDFファイルの写真にて提供するという、極めて有用なものである。その収録範圍の完全さは不明だが、日本では到底お目にかかれぬ数多くの雑誌資料が網羅されており、台湾研究もここまで成熟したのかと刮目させるに十分な質量を誇る。キーワード「芥川龍之介」による検索結果は、全28件(因みに「西川満」だと320件ヒット)。残念ながら、台湾人による刊行物は一切含まれず、また中国語(台湾語)によるものも見られない。その中には短歌誌『あらたま』や『愛書』などの文芸誌のほかにも、『臺灣警察協會雜誌』(1929)掲載「現代著名文章家小傳(一)」、中には『臺北州時報』(1929)掲載「臺北州施設事項調査會設置-調査」というものまであるので何かと見てみれば、農業事情や蕃人調査といった資料の“埋め草”に、「警句集」と題して芥川の短文がコラムで引かれており、その検索の精度の高さを窺わせる。芥川文學に関する純粋な評論、エッセーだけを選び出すと、二篇のみ求められる。興味深いことに、二篇の著者は同一で、在台日本人でいわゆる「湾生」<sup>23</sup>の新垣宏一という人である。まず、そのうち的一篇、西川満編輯『文芸台湾』掲載「支那譯について」(1942年)から引用してみよう。

前から芥川龍之介の著書を蒐めてゐるが、英譯本や独譯本も手に入れたので、支那譯本にも手をのばしてゐたが、支那事變の起つた昭和十二年の夏に、教え子の何氏金花から馮子韜譯の「芥川龍之介集」を買つた。夏休で福州に帰省した彼女が向ふの本屋で探して呉れたものだ。事變が起つたので、彼女は命からがらこの本を持つて臺南に引揚げて來た。(……)次に手に入れたのは湯鶴逸譯の「芥川龍之介小説集」である。これは事變後上海の父が送つてくれたものである。

今年になつて手に入れたのは魯迅等譯の「芥川龍之介集」で、これは上海の妹が送つて呉れた。しかもそれを送つたのは昨年十二月八日、大東亞戦争が起り、上海で英砲艦が撃沈され

た日であった。<sup>24</sup>

新垣は、こうして入手した芥川の中国語訳を原文と丹念に照らし合わせながら、中国語訳語の問題点などを詳しく論じている。「芥川迷」らしい文章と言えよう。

新垣（にいがき）宏一（1913-2002）、高雄市の生まれ。1937年、台北帝大文政学部文学科卒。卒業後は、台南第二高女、台北第一高女の教諭として、戦後まで一貫して台湾に留まった。台北帝大時代は島田謹二（1901-93）の下で文学修行、『台大文学』やまた『第一線』『台湾文芸』<sup>25</sup>『華麗島』『文芸台湾』など台湾側日本側双方の雑誌に創作、評論など数多く執筆しており、台湾文壇での活躍も顕著である。実は彼の名前は、台湾研究の上でも一定の知名度を得ている。それは台湾を描いた佐藤春夫「女誠扇綺譚」と関係付けられたものであった。和泉司「日本統治期台湾文壇における「女誠扇綺譚」受容の行方」（2002年）によれば、

日本内地の作家ではなく、台湾内部から「女誠扇綺譚」に言及したのは、管見の限りでは新垣宏一がその初めの人物である。（中略）新垣は、現在の「台湾文学」研究において、作家としてはほとんど注目されていない。彼が現在研究上取り上げられるのは、台湾における「女誠扇綺譚」研究の先鞭をつけた人物だからである。<sup>26</sup>

新垣のもう一篇の芥川関連文献は、「竹内眞著「芥川龍之介の研究」と題される評論で、1936年1月『台大文学』創刊号に掲載されている<sup>27</sup>。内容は、初めての芥川総合研究として該著を高く評価しつつも、少なくない部分が恒藤恭や日夏耿之介の『文芸春秋』『芥川追悼号』掲載分の引き写しであると指摘するなど、台北帝大文学科学生としての矜持に溢れる評論となっている。

著者は國文科出身であったからかうした王朝物の素材を発見することは容易であつたらう。しかもこれだけの発見に甘んじてゐては芥川の素材研究は大いに不備であるといはなければならない。<sup>28</sup>

このように、新垣は日本（内地）における芥川研究の本丸に堂々と対峙する姿勢を示している。だが逆に、そこには“湾生”として中央文壇に決して身を置くことのできないコンプレックスが見え隠れしているようにも感ぜられる。新垣の文学活動について、和泉司は「新垣宏一「砂塵」論——「異文化を見る」という視点」（2003年）の中で、次のように分析する。

新垣宏一は高雄中学—台北高校—台北帝大—植民地教育官僚というルートを経た、典型的な植民地知的エリートであった。おそらく彼は知性によって台湾を理解しようとし、それが「女誠扇綺譚」調査や、「砂塵」に散見されるような台湾の民俗に関する知識となって現れている。しかし、このような「理解」の方法は、結局は「他者」に対して向けられるものにはならない。（中略）自分自身が、「在台内地人」という、「日本統治期台湾」という時空において、生得的に「権威・権力・支配」の表象（あるいは実権）を持ち、それを「台湾」に対して行使する立場にある、ということに気づけない時、そのような描写は個人的な意図を越え、政治的民族的な差別構造をはらむことになる。<sup>29</sup>

「在台」（湾生）として完全なる内地人ではなかったが、しかし無論台湾人ではなかった新垣のそ

の台湾理解は、和泉が指摘するように決して透徹したものにはなり得なかった。そうした新垣の芥川龍之介「受容」はまた、純粋なる内地人にとってのそれと同一のものでは有り得なかった。彼は遠く台湾にありながら、そのあたかも“外国”文学の如き芥川の文学を憧憬し、外国語訳に至るまでいちずに蒐集していたのである。ここにも確かに、「台湾」における芥川受容を認めることができる。

以上考察してきた複雑かつ多面的な様相こそが、小論のタイトルに「諸相」と付加する所以のものである。

### 注

- 1 「近代中国における大正文学の受容——『現代日本小説集』及び芥川龍之介を手掛かりとして」2014年10月『言語文化論究』（九州大学言語文化研究院）第33号、19～37頁。
- 2 台湾文学との対峙という文脈から日本近代文学を把握した研究は、管見の限り、日本人研究者戸田一康のものが指摘できるのみ。戸田氏の芥川関連論文に、「葉石濤與芥川龍之介——十字架的問題」（2003年12月『國文天地』223期）、「葉石濤の「玫瑰項圈」と芥川龍之介の「南京の基督」——その相似点と相違点」（2008年12月『台湾日本語文學報』24号）がある。
- 3 『羅生門』（1986年4月、水牛図書出版事業有限公司）、200頁。
- 4 前掲注3『羅生門』、15頁。
- 5 具体的には台湾の（国文）教育における芥川の扱われ方等々調査する必要がある。詳細については課題としたい。
- 6 宮坂覚編『芥川龍之介と切支丹物 多声・交差・越境』（2014年、翰林書房）、482頁。
- 7 以下、『台湾日日新報』に関して、『『台湾日日新報』近代文学関係作品目録 昭和編（1926-1944）』（中島利郎、横路啓子編、2014年、東京：緑蔭書房）の編者による解説等を参照した。
- 8 前掲注7、中島氏の解説によれば、戊戌政変の1898年12月4日に台湾に逃げた章炳麟は、折しも同年に創刊された『台湾日日新報』の漢文欄を担当することになった。だが、日本人との折り合いが悪く、翌1899年6月10日には東京に去ったという。その後、1902年に東京に留学した魯迅らに講義を授けることになるのである。
- 9 前掲注7、横路啓子「解説」。
- 10 楊肇嘉「臺灣新民報小史」『景印中國期刊五十種《臺灣民報》《臺灣新民報》』（1973、台北：東方文化書局）附載、13頁。
- 11 『台湾文学史稿』（1987年、文学界雜誌社初版）、30頁。翻訳は、中島利郎・澤井律之訳『台湾文学史』（2000年、研文出版）、34頁による。
- 12 「A 鉦山の娘」は『松田解子自選集』第5巻（2007年、沢田出版株式会社）に収録され、その解題によれば、「『戦旗』一九二九年一月号の「生きた新聞」欄に発表」とある。その前年1928年の『創造月刊』に翻訳が掲載されていることから、原載は『戦旗』ではない可能性が高い。なお当時の台湾文芸誌を繙くと、張資平は、当時の台湾文壇にて重視されていた感がある。以上、待考。
- 13 当時の張我軍における恋愛主題について、豊田周子「1920年代の台湾における張我軍作品の意義——新詩「乱都之恋」から中国語白話小説「白太太の哀史」まで——」（2007年9月『現代中国』〔日本現代中国学会〕第81号）に詳しい。
- 14 周作人『『文学論』訳本序』（1931年6月18日筆。『看云集』所収〔2001年、石家荘：河北教育出版社『周作人自編文集 看云集』、81頁）は張我軍訳、夏目漱石「文学論」の序文である。

- その他にも周作人が張我軍の訳業に言及した箇所は複数確認でき、張我軍の日本文学翻訳を周作人が支持していた様子が窺える。例えば、周作人『『文載道文抄』序』（1944年9月1日刊『古今』第54期。『立春以前』所収。『周作人散文全集』第9巻〔2009年、広西師範大学出版社〕、255頁。）に、「近讀武者小路氏の小説《曉》，張我軍君譯作“黎明”，第一回中有一節話云（……）」とある。なお、張我軍は1942年11月に東京で開かれた第一回大東亜文学者大会参加のために来日した際、武者小路実篤に直接会っていた。『岩波講座「帝国」日本の学知』第5巻（2006年、岩波書店）、山口守「第1章 植民地・占領地の日本語文学」、59頁参照。山口氏からは直接、張我軍の活動について貴重なご教示を賜った。
- 15 河原功「中国雑誌解題『文芸台湾』（1975年2月『アジア経済 資料月報』17巻12号）に、「台湾文芸家協会」の賛助会員名簿が挙げられており、そこに「松田解子」の名前が見えている。河原は「いずれも西川満が『愛書』『媽祖』等を通じて知り合いになった人物で、（……）私は、内地文壇の延長化、一体化を図ろうとする台湾文芸家協会が、その基本姿勢を誇示したものだとしている。」と記す。
  - 16 陳芳明『台湾新文學史』（2011年、聯經出版事業股份有限公司）、76頁。訳文は、陳芳明著、下村作次郎他訳『台湾新文学史』上巻（2015年、東方書店）、62頁（当該部分は野間信幸訳）による。
  - 17 『台湾時報』195号、35頁。なお該文は、河原功『台湾新文学運動の展開——日本文学との接点——』（1997年、研文出版）に一部引用があり、参考にさせて頂いた。なお、著者の河崎寛康なる人物は不詳だが、他の箇所でも野上弥生子の台湾訪問の伴を仰せつかったなどの記述もあり、総督府の官僚だった可能性が高いと考えられる。
  - 18 前掲注16に準ず。原著『台湾新文學史』、31頁。訳文は、『台湾新文学史』上巻、11頁（野間信幸訳）。
  - 19 島田謹二「台湾の文学的過現未」（1941年5月『文芸台湾』2巻2期）。前掲注14『岩波講座「帝国」日本の学知』第5巻（2006年、岩波書店）、藤井省三「第5章 日本における台湾北京語文学の受容」、210頁参照。
  - 20 台湾文壇形成過程における日本に対する複雑かつ微妙な意識とその現れを仔細に読み解いた、和泉司「憧れの「中央文壇」——一九三〇年代の「台湾」文壇形成と「中央文壇」志向（『ポストコロニアルの地平』〔2005年、世織書房〕所収）を参照した。
  - 21 1995年1月、《中外文學》（國立臺灣大學外文系）第23巻第8期。
  - 22 松永正義『台湾を考えるむずかしさ』（2008年、研文出版）からの連想。因みに同書で著者は、当時の台湾における台湾人と日本人によるそれぞれの文学圏を同列に論ずべきでないことを述べている。
  - 23 「湾生」とは字の如く日本統治時代の“台湾生まれ”日本人を指す。戦後、日本に強制送還された日本人約50万人のうち「湾生」は20万に上るとも言われる。だが、例えば3歳で台湾に渡った西川満（1908-1999）をどう扱うかなど些か微妙な問題もあるようだ。
  - 24 「支那譯について」1942年5月20日『文芸台湾』4巻2号、41頁。
  - 25 1935年7月『台湾文芸』2巻7号掲載の小説「訣別」では、主人公に「芥川の自殺は唯美主義の究極だ」と語らせている。69頁。
  - 26 和泉司「日本統治期台湾文壇における「女誠扇綺譚」受容の行方」2002年12月『藝文研究』83号。なお最近では、林慧君「新垣宏一小説中の台湾人形象」（2010年6月『台湾文学学報』16期）のように、西川満、坂口禰子、濱田隼雄の次に位置する「在台日本人」の重要作家として、

新垣を評価する研究も出てきているようだ。

- 27 実は、1936年3月『台大文学』1巻2号に、やはり新垣の著になる「奉教人の死」に就て」が掲載されている。「切支丹物」の傑作について論じた30頁にも及ぶ鋭利かつ本格的な芥川論である。台湾における日本人による日本近代文学受容の問題は、資料的側面も含めてかなりの複雑さを有すると考えられる。詳細については、今後の課題としたい。
- 28 1936年1月16日『台大文学』1巻1号。56頁。
- 29 和泉司「新垣宏一「砂塵」論——「異文化を見る」という視点」 2003年12月『三田國文』38号。

**追記：**小論の構想は、2016年5月15日、活水女子大学で開催された平成28年度（第64回）九州中国学会大会にて報告させて頂いた。司会を務められた西南学院大学新谷秀明先生を始め、長崎県立大学の松岡純子先生、福岡大学の間ふさ子先生ほか多くの方々から貴重なご教示を賜った。

なお、本研究はJSPS 科研費基盤研究（C）「中国における日本近代文学受容の研究——魯迅・周作人編『現代日本小説集』を端緒として」（課題番号：26370411）の助成を受けたものである。

## 芥川龙之介在台湾的受容状况研究

秋 吉 收

笔者曾在《近代中国对大正文学的译介与接受—以《现代日本小说集》和芥川龙之介为线索—》一文中考察了芥川在中国的受容状况。芥川的《支那游记》(1925年创造社)出版后便受到当时中国的批判从而也引起了广泛的关注,鲁迅等人很快予以译介,芥川文学因此在中国近代文学中留下了颇为显著的印记。

那么,台湾的情况又是怎样的呢?虽然现在台湾也把芥川文学观为日本近代文学的经典,但当时对芥川文学的翻译介绍少之又少,至少目前笔者还没有发现这方面的资料。1895-1945年的五十年间,台湾一直是日本殖民地这一事实的影响,是不可忽视的。因此芥川作品的汉译状况、以及日本殖民地这一特殊环境中的“台湾人”、“日语”“日本人”等,成为本文考察台湾的芥川受容状况的基本视角。